東京バッハ合唱団 月報

［第 638 号］2015 年 8 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101
Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3- 47604
Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO
Monthly Newsletter No. 638
August 2015
—
5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

〈3.11 被災地訪問演奏＝福島県・南相馬公演〉世田谷プレコンサート

松原教会でのプレコンサートを終えて

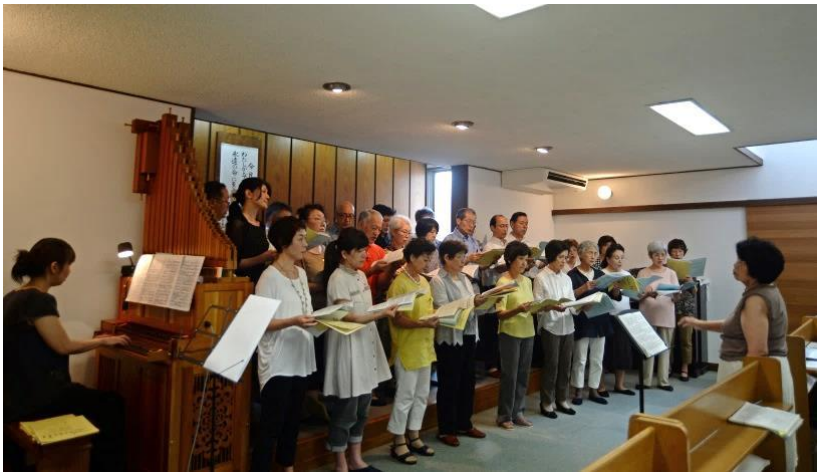
山崎 美奈子（団員：ソプラノ）

去る 7 月 12 日（日）に日本キリスト教団松原教会にて、本合唱団のコンサートが行われた。当日は大変暑い一日となり、真夏の様な陽気になった。前日のリハーサルの前の日までは、どんよりとした曇り空が続いていたが、気持ちが天に通じたのであろうか、急に空は青く澄み渡った。その暑い最中、大勢のお客様がお越し下さり、席を追加する程であった。このコンサートは､わたくしが入団して初めてのコンサートであり、各パートの人数も限られていた。それだけに思い入れも強かった。この日を迎えるまでには、わたくし自身において、以下の様な日々の流れがあった。

わたくしは、ピアノの指導と演奏の経験を持つが、歌も大好きで、学生時代は副科で声楽を学び、報酬有る無しに拘わらず披露させていただいていた。また、ピアノ曲ではロマン派の作品に触れることが多いのだが、なぜか昔からバロックや宗教音楽が好きであり、ヨーロッパの教会で讃美歌を初めて聴いた時のあの感動は忘れられない。神聖なる静寂な空間にパイプオルガンの重厚な音と澄んだ歌声が響き渡っており、全身鳥肌が立つ程であった。バッハの音楽は神を賛美するものと言っても過言ではないであろう。これまで様々のジャンルの音楽に触れて来たが、バッハの作品に触れると、安堵感と人類が深く考察せねばならないものを感じるのである。

ところで、わたくしが東京バッハ合唱団に入団を決めた理由は、純粋にバッハの作品に触れたいということと、何よりもバッハの作品を日本語で歌うことに大変興味があったからである。正直に申し上げると、声楽をドイツ語とイタリア語で学んだこともあり、入団当初は、バッハの作品を日本語で歌うことに違和感があった。楽譜をいただくと、そこには通常の音符と大村先生が訳された歌詞が書かれていた。わたくしは、まず作品のメッセージ性を問うために、その歌詞を咀嚼する様にした。その後、週 2 回の練習に通い、次第に歌い込むにつれ、自分の中に変化が訪れた。大村先生が訳されたお言葉が自分の中で噛み砕かれ、伝えたいメッセージが明確となり、自分自身の内なるものと一体化して来たのである。日本語で歌う良さは、意味が聴き手に伝わりやすいことではないであろうか｡そんな実感を得て、コンサート当日を迎えることになったのである。

さて、コンサートの演目は、コラール 2 曲とカンタータ 81 番、92 番とモテット 3 番《イエス よろこび》であった。これら楽曲について留意して来た点は、音楽的要素や声楽的な基礎は勿論のこと、まずはバッハの精神性を表現することであった。バッハは西洋音楽の伝統に従い、多くの 4 声部のポリフォニーを作曲したが、そのカンタータでは、和声の効果を高めるために、各パートの音を良く聴き、自分のソプラノの音を音符と休符通りに完璧に表現する様に努めた。また、日本語を美しく発音し､たとえ 1 音に 2 文字（2 音節）が乗っていても、乗った言葉をきちんと音に乗せて伝えることに留意し、特にモテットに関しては、この 2 点に心を砕いた。因みにこのモテット 3 番は、バッハの数点のモテットの中でも一番優れていると言われるほど素晴らしいものである。それぞれ異なる内容を持つ 11 節から成り､6 つのコラール聖歌の間にローマ書 8 章の聖句が交互に組まれ、明瞭なシンメトリーで構成されている。そして各節はメッセージが異なる。なので、そのメッセージを伝えるために内容を良く理解し、ある節では荒々しく歌う部分とイエス様の庇護をスティルに表現して対比をさせた。またある節では魂がさ迷う感じを意識し、別の節ではキリスト者の意志



■「プレコンサート＠松原教会」､前日のリハーサル風景(7/11). オルガンは鈴木礼子さん.
撮影：鈴木常彦（団員）

を力強さと躍動感をもって歌った。中でも第 10 節の終結部のソプラノが歌いあげる部分は、神の霊を感じ取り声高々と歌い終えた。この様に非常にドラマティックであるモテットを神の存在を感じながら表現した後、最後にカンタータ 147 番のコラールをお客様と一緒に歌った。モテットとはがらりと変わり、カンタータ 147 番のコラールは、牧歌的でとても美しい優しいメロディーであり、自身も癒やされる。こうして全ての作品を歌い終わり、この日のコンサートは終了した。お客様は満面の笑みで拍手をされていたが、実際にお客様にはバッハの和声が美しく響き聴こえただろうか。また、バッハの象徴法でもあるピクトリアリズム［絵画的描写］は届いたであろうか。

その後、コンサート終了後と後日に、この日の歌声を聴かれた方から、「素敵でした」「光がチャペルに入り込んで、本当に綺麗でした」などのお言葉をいただいた。バッハの作品を理解して下さり、今回の歌声とステージに共感して下さったのだと有難い想いであった。バッハは生涯、画像と言葉を結合するのを好んだ様であるが、教会内の雰囲気と重なり、バッハの望む絵画的描写が少しはお客様に届いたようである。

大村先生のご指導は時には罵声が飛ぶ程厳しい。けれどもそれは、団員一人ひとりと伴奏者に深い愛情があるからであろう。先生の指揮に呼吸を合わせる自分の中で、ときおり思い出すことがある。嘗て生徒さんにピアノの指導をする際に、身体を支えながら手の形や運指を手取り脚取りお教えし、聴音指導では、メロディーを提示しながら拍をカウントしてあげていたこと諸々である。指導法は異なるが、音楽を愛するものへ注ぐ愛情は同じである。今、正にそれらが自分自身の財産になっていることは確かである。その財産を今後も活かしていくことは、ささやかながらもわたくしの役目の一つであると考える。

今回のコンサートを通して、合唱団としての課題については、今後も真摯に取り組まねばならないと考えるが、皆様とバッハの作品の祈りや喜びを共感できたことを嬉しく思う。最後に、大村先生を初め、今回のプレコンサートに関わられた全ての皆様に、感謝とねぎらいと喜びの言葉を捧げたい。

■首都圏にお住いの皆さまへ、ちょっとだけ“南相馬”

◇第 112 回定演（南相馬公演）公開リハーサル@荻窪教会
・8/18（火）、18:00～20:30
・8/20（木）、18:00～20:30
無料。両日とも 10 名限定。要予約、事務局あて申込み
［8/21（金）、22（土）、ツアーと本番］

◇報告コンサート@荻窪教会
・9 月 26 日（土）、14：00 開演　**無料。先着 80 名。予約不要**
・演奏：坂田和泉 Vn、伊藤恵以子 VC、石川優歌 Org

○会場＝いずれも日本キリスト教団・荻窪教会
土曜練習場。JR 中央線／地下鉄丸ノ内線「荻窪」駅下車、南口より徒歩 8 分。杉並区荻窪 4-2-10。駐車場無し
○問合せ/予約（公開リハのみ）＝合唱団事務局
電話 03-3290-5731、メール office@bachchor-tokyo.jp

南相馬公演の 2 つのカンタータ

・第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》
Ich hab in Gottes Herz und Sinn BWV 92

・第 81 番《主イェス眠り いかにすべきわが望み》
Jesus schläft, was soll ich hoffen? BWV 81

大村 健二（団員：テノール）

福島県南相馬市での定期演奏会が、いよいよ目前に迫りました（8 月 22 日）。

今年の春になってから、世田谷・杉並両区の区報や朝日新聞の紹介記事などによってこの企画を知り、ご参加くださった団員のかたがたは、短い練習期間のなかで、さぞや悪戦苦闘をなさったことでしょう。その努力の甲斐あって、音楽の輪郭がようやくほの見えてきたようです。残された期間、磨きをかけて、福島のみなさんに最高のバッハをお届けしたいものです。

本年 2 月号月報（第 632 号）には、早々に、主宰者による「第 112 回定期演奏会の開催にあたって」の挨拶原稿「今日の出会いを祝してください」が掲載されました。これは、ほぼそのまま、南相馬公演の当日配布プログラム巻頭に置かれる予定ですが、そこで紹介された福音書の引用をくり返しておきます。

> イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、「主よ、助けてください。おぼれそうです」と言った。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凪になった。人々は驚いて、「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」と言った。
>
> （新約聖書「マタイ福音書」8 章 23－27 節）

教会暦の事情

ご存じのとおり、バッハの教会カンタータは、当時のドイツ・プロテスタント教会の慣習にしたがって、年間の日曜日および祝祭日の礼拝のために作曲され、演奏されましたが、その際に歌詞台本となったものは、その各礼拝の当日に朗読される福音書（「教会暦」により箇所が定められている）のテーマから発想されます。われわれの 2 つのカンタータを例にとれば、**第 81 番《主イェス眠り いかにすべきわが望み》**（事情があって、第 92 番に先立って 2 曲目から始めます）が初演された礼拝（1724 年 1 月 30 日）では、上に引いた章句がまず朗読されます。つづいて牧師が、おそらくこの記事に因んだ説教をし、そのあとでこの作品が演奏されました。バッハの聴衆は、ですから、まず朗読によって

物語の状景をあたまに描き、説教によって物語の信仰的な絵解き、あるいは意味づけを教えられ、最後にバッハ氏の深い聖書解釈による卓越の音楽を聴くことができたわけです。説教のあいだは眠っていた聴衆も、やおら背筋を伸ばして聴き入ったことでしょう。300年後には巨匠と称賛される作曲家の、珠玉の作品なのですから。

このカンタータの台本作者は知られていませんが、ぜひ冒頭のアリアから、全テクストを通読しておいていただきたいものです(*)[p.4 脚註]。荒れ狂う嵐と怒涛の描写を背景に、随行した弟子たちや、たまたま小舟に乗り合わせたガリラヤ湖畔の村人たちの、恐怖と不安の心理に焦点を当てたシナリオは見事です。「なにゆえ怖るるか 信仰うすき者ら」(マタイ 8:26)のイェスのアリオーゾ(第4曲)を転回点に、毅然と嵐を叱りつけるアリア、〈うれし!〉と始まる希望のレチタティーヴォを経て、ここで初めて、そして最後に合唱が〈み許により 勇みてわれ 向かい行かん〉(つづくモテット《イェス、わが喜び》Jesu meine Freude の主題コラールでもある)と歌いだします。コラールの主語は「われ」(単数)であっても、作品の中では、弟子たちおよび乗り合わせた民衆の心情を束ねて表現するのがコラールの役割であり、初演に立ち会ったライプツィヒの会衆は、もちろん「わがこと」として大いに安堵することになります。後世に歌うわれわれも、その安堵を、精いっぱいホールのお客様にお伝えしたいものです。「わがこと」の実感、想像力が大切です。

ここで、多少ややこしい教会暦の事情に触れます。これがカンタータの“肝”でもありますから、ぜひ興味をもっていただきたいと思います。18世紀ドイツのバッハの生活圏での慣習ですので、今日の日本のカトリックやプロテスタントの教会の事情とは多少異なるかもしれません。

カンタータ第81番は、顕現節後第4日曜の礼拝に供するために作曲され、トーマス教会付属学校のバッハの生徒たちやバッハ周辺の楽師からなる楽団に大学生たちも加わって、短い準備期間(たぶん数日)の後に上演されました。顕現節・後・第4日曜は、「顕現節」から数えて4つ目の日曜日です。聖書の物語では、東方の三博士が不思議な星に導かれて、生まれたての御子イェスのもとにたどりついた、と書かれていますが、この、救い主の存在が異邦人世界にはじめて知られたことを「顕現」(または「公現」)と称し、降誕日(12月25日)から13日目の1月6日を顕現日と定めています。第2曲のレチタティーヴォに〈むかし主は 星もて博士らに教えぬ、正しき道を〉とある通りです。

1724年の「顕現節後第4日曜」は1月30日だったということが分かっていて、この日が初演の当日とされます(**)。時候は真冬です。では、次の日曜日はどうなるかというと、当地での教会暦によれば、「顕現節・後」の次には、「復活節・前」が始まりますが、その開始は復活節前第9日曜と定められているので、毎年、春分や満月という自然界の都合で復活節の日付が設定されるキリスト教会のカレンダーでは、1月6日と固定されている顕現節の後、毎年移動する「復活節前第9日曜」までにいくつの日曜日が入るかは(書いているほうも面倒ですが、当時の関係者も計算は面倒だったことでしょう)、年によって異なり、この年には4つの日曜日が入って、復活節前第9日曜が続きました。その後、数を一つずつ減らして「復活節」(イースター)が訪れると、季節は春になります。

こうして、ようやくもう一つのカンタータ、今回の公演の第1曲目、**第92番《わが心 思い 神にゆだねたり》**の内容に触れる環境が整いました。この作品の初演は1725年1月28日であり、教会暦では復活節前第9日曜とされています。カンタータ第81番の初演日を思い出してください。1724年1月30日でした。ほぼ同じ時期ですね。そうなのです、翌1725年の教会暦では復活節前第9日曜の前に3つの日曜日しか入らず、「顕現節後第4日曜」は存在しません。したがって、この年には、礼拝で「舟の上のイエスが嵐を叱り、海を静める」という、上に引用したこの聖句が読まれることはなかったようです(?)。では、この復活節前第9日曜で朗読される福音書は何かというと、マタイの20章1−16節、「ぶどう園の労働者のたとえ」と呼ばれる、これも有名な箇所で、農園の主人に、早朝に雇われたものも、昼に雇われたものも、終業まぎわに雇われてちょっとしか働いていないものも、同じ一律の賃金が払われた、という話しです。第92番の内容とはまるで無縁です。

常識的には、ライプツィヒの主要教会であるニコライ教会とトーマス教会の、教務の責任者や牧師たちとの相談の上で、各礼拝の朗読箇所や主題説教の内容、讃美歌(コラール)などが決められ、もちろんバッハ氏のカンタータの主題も、採択される歌詞台本も、合意の上で決められたはずです。この食い違いの理由は分かりません。ただ事実なのは、教会暦の上で、顕現節後第4日曜(第4まである年では)と復活節前第9日曜が踵を接している、ということであり、1725年には顕現節後「第3」のつぎに「第4」が入らなかった、ということです(表参照)。

教会暦	福音書と主題	1724年	1725年
顕現節後 第3日曜	マタイ 8:1-13 重病を癒す	1月23日 BWV 73 初演	1月21日 BWV 111 初演
顕現節後 第4日曜	マタイ 8:23-27 嵐を静める	1月30日 **BWV 81 初演**	＜存在せず＞
復活節前 第9日曜	マタイ 20:1-16 日雇いの賃金	2月6日 BWV 144 初演	1月28日 **BWV 92 初演**

カンタータ第81番の歌詞をすでに知っているわれわれにとっては、第92番の内容から「嵐を叱るイエス」の物語が彷彿とされる、どころか、抽象度がかなり高

まってはいますが、ほぼ確実にマタイ 8 章の状景を連想します（とくに第 2 曲のレチタティーヴォ部分〈水の上に主は立ちて　われにいのち与えん〉や、第 3 曲のアリア〈見よ　いかに砕け　裂け…〉、第 5 曲〈はや　怯むをやめよ〉、第 6 曲〈険しき風吹くさなかにも〉他）。

以下は推察、もしくは妄想にすぎません。

バッハは、この前の週の日曜日（1725 年 1 月 21 日、顕現節後第 3 日曜）には、カンタータ第 111 番《み心は　つねに成し遂げらる》Was mein Gott will, das gscheh allzeit BWV 111（われわれは、2011 年の 1 月の定演で取りあげたばかり）を初演しているのですが、このカンタータ作品での核となるコラール（カンタータと同名、ブランデンブルク辺境伯アルブレヒト 1547 作）の旋律 (***) は、まさに、われわれのカンタータ（第 92 番）の旋律と同じものであり（この年のライプツィヒの会衆は、2 週連続で同じ旋律のコラール・カンタータを聴いた！）、第 111 番のプランを練っている最中に、同旋律の着想から、パウル・ゲールハルトのコラール〈わが心　思い　神にゆだねたり〉（Ich hab in Gottes Herz und Sinn 1647 作）の、次週の作品への応用を決めていたのではないでしょうか。この時期（トーマス・カントル着任 2 年目）は、ご存じのとおり、バッハが「コラール・カンタータ」の研究開発に情熱を傾けていたことが知られており（ほぼ連続して 40 曲を作曲、初演した）、「後第 3」の次は、「後第 4」、ならば「嵐を叱るイエス」、嵐に言及する節もあるし……。かくして、創意工夫にあふれた全 9 曲からなるコラール・カンタータの大作を構想していた、あるいは、もう完成していたのかも知れません。ですから、今さら、今年は「後第 4」はありません、「前第 9」です、といわれても、もう時間はありません。今年はこれで勘弁してください。めでたし、めでたし。

バッハのお気に入りコラール

ところで、バッハがことのほか愛好したこのコラール旋律は、もともと 16 世紀のフランス・ルネサンス時代の世俗の歌曲（＝シャンソン、1528）に由来するものだそうですが、ドイツ人の好みに合ったようで、その後、多くのコラール作家が、その旋律にあわせてコラール詩節を創作し、バッハの時代（18 世紀）には民衆によって大いに愛唱されていたようです。そのうちバッハが、旋律や歌詞を採用したものは、カンタータ作品で 6 曲（BWV 103/6、BWV 65/7、**BWV 92 全曲**、BWV 72/6、**BWV 111 全曲**、BWV 144/6）にのぼります。

《マタイ受難曲》にも、この旋律によるコラールが登場します。どんな場面で歌われたかというと、前半の山場の一つ、「ゲツセマネの園」のシーンを締めくくる重要な位置においてです。イエスが、十字架の死を予感して、「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈ります。その間、弟子たちは眠っている。「父よ、私が飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのなら、あなたの御心が行なわれますように」。弟子たちは眠りほうけている。バスのレチタティーヴォとアリアを挟んで、その後に決然と（！）歌われるのがこのコラールです。われわれの日本語訳詞では〈み心は　つねに成し遂げらる〉と歌われました。上に述べた第 111 番と、詞・曲とも同じものです。

前述の推察を経たわれわれは、このたびの第 92 番《わが心　思い　神にゆだねたり》では、第 81 番と同様、嵐に翻弄される小舟のなかの弟子たちと、悠然とまどろむイエスとの対比を状景として想い描きながら歌い、あるいは聞くことになります。演奏時間が約 30 分という大曲の端から端まで鳴りとおす旋律 (***) が、〈わが心　思い　神にゆだねたり〉の絶対的な信頼を鼓舞しつづけるのです。

余談ですが、第 92 番では弟子たちが怯え、イエスは眠っています。《マタイ受難曲》のなかで眠っていたのは弟子たちで、イエスがひとり苦悩の中にとり残されていました。バッハの着想の自由さ、卓抜さに魅了されませんか。〈了〉

◆《ヨハネ受難曲》ＢＤをお聴きくださった小倉大輔様よりメールをいただきました。

（歌詞テロップつき。創立 50 周年記念連続演奏［V］第 110 回定期、2014.3.15、杉並公会堂）

［……］独唱の方々の歌唱については、歌詞が聴き取れるため字幕は無くても差し支えありませんでしたが、合唱の皆様の歌唱の方は、録音上だと分かりづらい場面もあり（同じ歌詞が繰り返されたり、日常的には使用しない語が使われていたり……）、歌詞字幕は、ありがたいものでした。

かねてより、自分の母語である日本語で歌われるクラシック音楽、特にバッハの声楽曲を聴いてみたい、と思っていた矢先に貴合唱団の存在を知り、大変嬉しかったです。

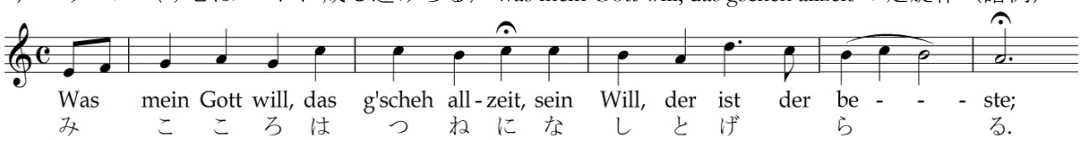
今後とも、ますますのご活躍をご期待申し上げます。

---

*）上演用の歌詞（大村恵美子訳詞）は、当団ホームページから参照できます。
http://bachchor-tokyo.jp/トップページ → 第 112 回定期演奏会 → 演奏会情報 → 曲目の「(訳詞)」をクリック。

**）1724 年のこの日の前後数週間、1/16 から 3/25 に演奏されたバッハ・カンタータの教会暦日の記述を伴なう歌詞冊子が、1971 年に、レニングラードの図書館で偶然発見され、近年のバッハ研究者の年代推定の確かさが実証されました。

***）コラール〈み心は　つねに成し遂げらる〉Was mein Gott will, das gscheh allzeit の定旋律（譜例）



2015 年 7 月 12 日（日）

プレコンサート@松原教会、アンケート

〇すばらしい歌声とオルガンに、天国にいるような感動で、涙が出そうでした。深く感謝します。すてきな一日をありがとうございました。

〇すばらしい会をありがとう！
アルト・ブロックフレーテ［リコーダー］の方々も、すてきに頑張ってくださいました。
オルガニストさん、すてきでしたよ。
横浜市の川和教会の仲間一同

〇何よりハッピーな心に満たされました。［当日］聖日礼拝でのマタイ 5 章の説教のあと、皆さまの 30 万の（いや 30 人でした）天の声が、きょう一日、背中から聞こえる心持ちです。
合唱団の皆さまの喜び豊かな表情での、お顔、お顔が心に残ります。東北の方々も、かならずや心満たされてくださると信じます!!

2015 年 7 月 18 日（土）

2015 年度「団員総会」と「懇親会」報告

小海　基（団員：テノール）

今年の総会は、この夏の福島被災地公演に向けての盛り上がりもあり、活発な意見が出された。新団員も増え、会計もやや黒字へと転じ、続けてきた団員一人あたり月額 1000 円の財務「支援金」も廃止となった。当日併設のバザーも小規模ながらも約 6 万円の収益があった。

その中で、各パートの質的向上の責任を持つ「パートリーダー」か、連絡係的「パートキーパー」かという論議もあったが、むしろ広報係・メディア係・記録係などが連携し、各回の練習を伝える各種手段（録音・ネット配信）を通じて、指揮者の「指示」や「変更」内容を逐次伝える役目を担うことで、同じ過ちの指摘に時間を取られないようにするなど、「質的向上」をめざすということになったのは、大きな前進であった。

その後荻窪駅前の「さかなや道場」でもたれた懇親会には、全部ではないけれども多くの新団員、3 名の後援会員のゲストまで加わって会場も一杯になった。新入団員を含む全員が一言ずつスピーチをし、普段練習に追われる中ではなかなか垣間見ることの出来なかった素顔に触れることが出来た。夏の野尻湖研修のような泊りがけの機会が少なくなった中で、改めてこうした各自の素顔の声を聞きあう機会を持つことの大切さに気付かされる懇親会であった。

// 新入団員を迎えて、被災地訪問公演の充実 //

大村 恵美子（主宰者）

今年に入ってからの、新聞記事の掲載や世田谷区、杉並区の区報での“被災地のみなさんの心の奥へ、日本語のバッハを届けませんか”という呼びかけが実って、10 名をこえる方々が入団され、そのうち 9 名の方々が南相馬に同行されることになりました。

さらに、遠隔の地からの参加団員も加えて、新しい顔ぶれを短くご紹介し、「8 月 22 日」を共に迎えるまでに、なるべく親しんでいただこうと思います。その他の経路でも、団員増加は続きそうです。

3 列目の数字「2/16」などは、入団の日付。自己紹介を添えてくださった方もいらっしゃいました。右端列の「紹介①」以下は、お寄せいただいた自己紹介の添付（下記）を示します。

新しいお仲間の紹介

S	伊藤昭子さん	2/16	世田谷区桜丘	紹介①
S	山崎美奈子さん	3/2	世田谷区砧	紹介②
A	鈴木峰子さん	1/10	江東区北砂	紹介③
A	相良聖美子さん	2/25	川崎市高津区	紹介④
A	橋元隆子さん	3/28	世田谷区船橋	紹介⑤
A	田尻玲子さん	4/11	杉並区荻窪	
A	清水英子さん	5/9	新宿区西落合	
A	藤根律子さん	5/9	東村山市恩田町	
T	高木克彦さん	5/11	新宿区西落合	紹介⑥
S	須藤富美さん		北海道釧路市	後援会員
A	松井賢子さん	4/20	愛知県豊橋市	
B	山本弘史さん		山形県東根市	後援会員
B	植田高弘さん	7/20	山口県下関市	後援会員⑦
T	田中克彦さん		国立市富士見台	団友⑧

＜自己紹介①：伊藤昭子さん＞

昨年 12 月、オペラ大好きな父（97 歳）を自宅で看取りました。さて、これからの数年をどのように過ごしたいのか、何をすれば楽しい日々を送れるか……、それはやはり“歌う”ことでした。すぐヴォイストレーニングを再開しました。「楽器はこわれてないよ」のお言葉を力に歌い始めました。

その直後に、世田谷区報を目にし、むかし宗教音楽研究会で歌っていたこともあり、「歌えるかも……」とお電話させていただきました。しかし、最初は楽譜の音符が小さく感じて歌えず、声も出ず、バッハの音楽は、“どんな声で”歌ったらよいか判らず……。イタリア歌曲とドイツリートの発声の違いなのか、もともと私の発声が半端なのかもしれないと、この頃、思うよ

うになりました。バッハの音楽は、先生に委ね、私は一つ一つの“音”を、“声”を、よく考えて歌ってゆきたいと思っております。

団員の皆さま、この半年、いろいろ助けてくださってありがとうございました。

＜自己紹介②：山崎美奈子さん＞

音楽を愛する、1 児の母でございます。

趣味は、お花（フラワーアレンジメント、プリザーブドフラワー、アーティフィシャルフラワー）、お茶（日本茶、紅茶、中国茶）、読書、絵画鑑賞、HOT ヨガを行うことです。

［当月報 p.1-2 に、「プレコンサート＠松原教会」の感想文掲載］

＜自己紹介③：鈴木峰子さん＞

初音幼稚園における「うたの楽しみ」という講座で、当団員の米山様（B）と知り合い、前回の定演を聴きに伺いました。「えっ?! バッハ?!」「意味のわかる日本語!!」 願わくば、好きでやってきた歌が、微力でも被災地の皆さまを励ます力とならんことを……。

＜自己紹介④：相良聖美子さん＞

福島のお役に立てるのではと応募しました。声以外は褒められたことがないので、この声は私の宝物です。でも歌用ではないようで、音がずれてしまいます。気持ち良く歌えるようになりたいです。

＜自己紹介⑤：橋元隆子さん＞

世田谷区報を見て、入会しました。

職場の元先輩が、ある日「いま《マタイ受難曲》を練習しているから、コンサート聴きに来て」と言ってくれて、はじめて東京バッハ合唱団を知りました。2007 年の公演だったようです。「死ぬまでに、いちど歌いたかった」先輩のことを思い出します。

＜自己紹介⑥：高木克彦さん＞

被災地で歌いたい、その思いだけで入団させていただきました。バッハは学生時代にちょっと触れただけ、その後半世紀近く、まったく無縁でしたので、正直、みなさんについていくのがやっとです。

でも、少しでもいい歌を届けたいので、残された練習時間、一所懸命がんばります。どうぞよろしくお願い致します。

＜自己紹介⑦：植田高弘さん＞

退職後、ウォーキングやボランティア活動等をして日々過ごしています。団員歴はわずか 1 年（1979 年）ですが、皆さんと一緒にうたう楽しさは今も変わりません。

＜紹介⑧：田中克彦さん＞

月報編集部が勝手にご紹介します。7 月に入ってからの土曜日、荻窪教会での練習に現われました。社会言語学やモンゴル学などの多くの著作でご存じの方もいらっしゃると思いますが、主宰者の友人です。団友としてたびたびコンサートをご来聴。打ち上げにも何度かお顔を出してくださいました（テノールの鏡貴之さんを連れて、一晩歌い歩き、飲み歩いたとか）。

この度は、東北訪問演奏に共鳴、バッハを歌ってみたいと一念発起し、ご多忙を押して参加の決断です。本来は自慢のテノール（ロシア民謡の！）ですが、今回は事情によりバス声部を、必死で練習しています。

〈3.11 被災地訪問演奏：福島県・南相馬公演〉

◆第 112 回定期演奏会◆

8 月 22 日（土）、13:30 開演（13:00 開場、16:00 終了）
南相馬市民文化会館（ゆめはっと）大ホール

- **カンタータ第 92 番《わが心 思い 神にゆだねたり》**
- 賛助演奏「大切なふるさと」「花は咲く」「故郷」
- **カンタータ第 81 番《主イェス眠り いかにすべきわが望み》**
- **モテット《イェス よろこび》**

［S］光野孝子、［A］佐々木まり子
［T］鏡 貴之、［B］山本悠尋、［Org］石川優歌
［室内楽］東京カンタータ室内管弦楽団
［賛助出演］そうま地方合唱を楽しむ会合唱団
［合唱］東京バッハ合唱団、［指揮/訳詞］大村恵美子

前売り 1000 円、当日 1200 円（全席自由席）
取扱い：合唱団事務局、または、会場ホール事務所

◆報告コンサート＠荻窪教会◆

9 月 26 日（土）、14:00 開演
日本キリスト教団・荻窪教会（土曜練習場）
上記定演より、カンタータ 2 曲とモテット

［Vn］坂田和泉、［VC］伊藤恵以子、［Org］石川優歌
［合唱と斉唱］東京バッハ合唱団

＜入場無料＞（先着 80 名、予約不要）

◆第 113 回定期演奏会・予告◆
「日常生活のバッハ」

2016 年 5 月 28 日（土）、14:00 開演
府中の森芸術劇場ウィーンホール（東京・府中）

- **カンタータ第 148 番《み名の栄光を讃えよ》**
- **カンタータ第 40 番《地に来ませり 神のみ子》**
- **カンタータ第 16 番《主 ほめ歌わん》**
- **カンタータ第 192 番《ああ感謝せん 神に》**

［A］佐々木まり子、［T］鏡 貴之、［B］山本悠尋
［室内楽］東京カンタータ室内管弦楽団、他

※本年 9 月 5 日より練習開始。合唱参加ご希望の方、事務局までお問合せください。

後援会会計報告

(1)前期: 2014 年 7 月－12 月

2014 年・後期	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	前期小計
収入							
後援会費	70,000	111,000	60,000	120,000	72,000	164,000	597,000
寄付金	0	0	0	0	0	18,000	18,000
ﾌｧﾝﾄﾞより繰入	0	0	0	0	0	0	0
＜収入合計＞	70,000	111,000	60,000	120,000	72,000	182,000	615,000
支出							
事務局費	70,000	70,000	70,000	70,000	70,000	70,000	420,000
渉外費	5,000	15,000	3,600	0	15,000	15,000	53,600
通信費	45,460	49,680	0	10,240	61,700	20,000	187,080
事務費	8,200	4,500	0	10,400	5,000	45,110	73,210
雑費	0	0	0	0	0	0	0
＜支出合計＞	128,660	139,180	73,600	90,640	151,700	150,110	733,890
							0
当期収支差額	-58,660	-28,180	-13,600	29,360	-79,700	31,890	-118,890
前期より繰越	-107,325	-165,985	-194,165	-207,765	-178,405	-258,105	-107,325
累計	-165,985	-194,165	-207,765	-178,405	-258,105	-226,215	-226,215

(2)後期: 2015 年 1 月－6 月

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	後期小計	年間
収入								
後援会費	24,000	144,000	72,000	163,000	119,000	180,000	702,000	1,299,000
寄付金	0	0	0	0	0	0	0	18,000
支援基金より繰入	0	150,000	100,000	50,000	0	50,000	350,000	350,000
＜収入合計＞	24,000	294,000	172,000	213,000	119,000	230,000	1,052,000	1,667,000
支出								
事務局費	70,000	70,000	70,000	70,000	70,000	70,000	420,000	840,000
渉外費	5,000	10,000	0	0	5,000	10,000	30,000	83,600
通信費	3,000	36,150	1,000	116,630	48,820	29,176	234,776	421,856
事務費	0	10,100	0	7,080	4,526	12,500	34,206	107,416
雑費	0	0	0	0	0	0	0	0
＜支出合計＞	78,000	126,250	71,000	193,710	128,346	121,676	718,982	1,452,872
当期収支差額	-54,000	167,750	101,000	19,290	-9,346	108,324	333,018	214,128
前期より繰越	-226,215	-280,215	-112,465	-11,465	7,825	-1,521	-226,215	-107,325
累計	-280,215	-112,465	-11,465	7,825	-1,521	106,803	106,803	106,803

(3)過去 9 年間の推移(2005-2013)

	2005 年度	2006 年度	2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度
収入									
後援会費	1,764,000	1,469,000	1,240,000	1,063,000	979,000	1,068,000	1,084,000	1,033,000	1,148,500
寄付金	441,500	356,500	41,000	231,000	47,000	230,500	142,200	868,000	60,500
基金より繰入	—	—	—	—	—	—	0	0	450,000
＜収入合計＞	2,205,500	1,825,500	1,281,000	1,294,000	1,026,000	1,298,500	1,226,200	1,901,000	1,659,000
支出									
事務局費	840,000	840,000	840,000	840,000	840,000	840,000	840,000	840,000	840,000
渉外費	95,000	200,000	85,000	46,000	65,000	45,000	90,000	155,000	91,000
通信費	313,989	469,445	448,740	409,384	392,013	542,860	460,397	350,629	555,375
事務費	64,887	375,235	249,123	88,731	155,140	126,419	64,447	131,100	110,790
雑費	0	0	0	0	0	0	0	0	0
＜支出合計＞	1,313,876	1,884,680	1,622,863	1,384,115	1,452,153	1,554,279	1,454,844	1,476,729	1,597,165
収支差額	891,624	-59,180	-341,863	-90,115	-426,153	-255,779	-228,644	424,271	61,835

［コメント］

・この 1 年間の後援会収入合計は、1,299,000 円（約 130 万円）。過去 9 年間の推移［表（3）参照］のなかでは、ほぼ平均値（1,205,388 円）に近いが、2009 年を底とすると回復基調。死亡や高齢による退会が増えるなか、新規の入会も目立つようになりました。

・支出合計は、1,452,872 円。平均値（1,526,745 円）をやや下回る。すなわち、相変わらず十分な後援活動ができていません。

・「支援基金」の立ち上げ（2015 年 1 月）により、基金からの繰り入れ収入 35 万円が、年度前期の赤字を解消し、年間では 106,803 円の黒字の結果となりました。後援会員、支援会員（サポーター）のみなさんに心より感謝を申し上げます。

後援会 新規加入／継続会員〔敬称略〕

（1）前期：2014 年 07 月－12 月

＜新規加入＞ 品川眞理子

＜継続会員＞ 高野京子、風岡和子、與語基宏、菅間五郎、池口康夫、花井鉄弥、丸山眞人、稲本佑子、務台孝尚、菅原昌子、小島陽子、箕浦正敏、重近 徹、瀬底恵子、市川義和、松原 誠、吉田佐貴子、小口幸成、高村明子、川戸龍夫（2015/2/20 歿）、中村美子、青田 健、恒松恭子、鈴木玲子、小堀徳子、松崎清子、渡辺さち子、武藤京子、鈴木 靖、加藤道子、高田功二、小出邦子、阪根隆司、本郷容子、堀 甲子、高橋美千子、猪狩恭子、東海林勝美、原田知子、田中玲子、三浦 隆、中西 碧、山本裕子、布施靖子

＜寄付＞ 猪狩恭子、田中玲子

（2）後期： 2015 年 1 月－6 月

＜新規加入＞飯久保廣嗣、八重樫捷朗、石橋光朗、諸川春樹、小笹俊一、大村鉄夫

＜継続会員＞植田高弘、鈴木徹太郎、大切幸一、相原要子、大村洋永、大滝政昭、藤田玲子、島 正孝、宇佐見邦輔、森永毅彦、森泉百合子、西村清志、大井 忠、小田切啓一、山下廣之、須藤富美、菊池安子、島崎美和、古野晴子、山本恵子、清田礼子、野村明子、北川 信、勝沼 淳、砂川治子、菅間五郎、瀬底恵子、風岡和子、石田美保子、百瀬禮子、神田弘子、水戸英雄、川戸好子、石田朝子、白井 均、中澤冨士子、宮崎恭子、恒松恭子、鈴木敬子、深津恵太、吉村雅典、笹野優子、大西洋司、星野弥生、橋本みどり、内田美枝子、丹羽 茂、池口康夫

支援基金（サポーター会員）報告

＜応募者リスト〔敬称略〕＞ （2015 年 1 月－6 月）

（ただし 001-003 の 3 名は、50 周年記念ファンドからの移行期・2014 年 12 月のご応募）

001 篠原亮子、002 山本栄子、003 山本裕子、004 村瀬喜久子、005 有家朋子、006 平原恵子、007 浜島和子、008 吉田弘、009 丸山道雄、010 村松充雄、011 恒松恭子、012 宮田光雄、013 宇佐美輝江、014 小田切啓一、015 飯久保廣嗣、016 森井眞、017（匿名）、018 小島陽子、019 八木誠一、020（匿名）、021 宮島信子、022 青田健、023 大村鉄夫、024 小栗静子、025 森延幸、026（匿名）、027（匿名）、028 猪狩恭子、029 荒井せつ子、030 加藤剛男、031 森永毅彦

＜会計報告＞（2015 年 1 月－6 月）

収入		571,000 円
支出		550,000 円
基金へ繰り越し		21,000 円
（支出内訳）	後援会補助（繰入）	350,000 円
	50 周年記念誌刊行費補助	50,000 円
	南相馬公演打合せ交通費補助	50,000 円
	月報座談会（6/21）経費補助	100,000 円

連載・新刊紹介 ＜第 1 回＞

どんな国家に生きたいのか、これからの世界を描く一助に

大村 恵美子

エマニュエル・トッド著

「ドイツ帝国」が世界を破滅させる ――日本人への警告

（文春新書、堀茂樹訳、2015 年 5 月刊）

現在、日本は、政権と民衆の過半数とが対峙して、「独立国家の仲間入りができるように、新しい憲法を」、「もうこれまでの国家では地球の常態は維持しきれない。人類の自滅を避けるような国際秩序を」と、真っ向からぶつかる日々が続いています。このようにハラハラの世相は、わが国だけではなく、アメリカ、ＥＵ、ロシア、中国、世界中の 5 大陸の隅々にまで及んでいて、誰も模範解答に至っていません。指導者が劣化したのか、民衆が愚昧なのか、どうやらそんなことではなく、人類は途方もなく大きな岐路に立たされ、試されているように思えてなりません。

生物がなるべく平等に生き延びられるような道を。これがまっとうな人間の目ざす道だろうと、私などは考えるのですが、賢人を指導者に、ではなく、資本主義に育てられた、世界中で 0.1％の超富裕層が、地球全体の富を動かして、邪魔な貧困層を絶滅させ、0.1％の経済トップクラスの連中がグローバルに連携して天井知らずの富の支配をもたらそうとする（自分個人の脆弱な生命は何の保証もないのに、まるで例外視して）、と、ばかばかしい狙いが、まかり通りつつあるのです。

わが国の政権が、徹底的にごまかしながら、己の野望をひた隠しにして状況を打破しようとしているのも、じつはこの国だけではなく、世界中の国家内で本質的には変わらない問題となっているような気がします。

こんな時に、どんな説得力のある人が登場しても、必ずそこには立地条件によるバイアスが、大なり小なりかかっているわけですが、フランス人であるＥ.トッドは、なるべく冷静、公平であろうと努めながら、ドイツを引き合いに出して、日本人にも警告を伝えようとしています。ただもうお先真っ暗で、絶望的だった人にも、5 年先、10 年先は果たしてどうなるだろう、もう少し長生きして、自分の努力の成果も見届けてみようか、という気持ちにならせるかもしれません。

コンパクトな一冊の中に、世界中の国々の現状が語られていて、とにかく一読していただきたく、私の意見など入れないで、20 数カ国を国ごとにまとめて、トッド自身の語り（文章）を引用することにします。月報には、数回に分けて、随時載せる予定です。

次回は、ドイツとフランス編です。お楽しみに。

＜つづく＞